
変節

北角 三宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変節

【Zコード】

Z0073Z

【作者名】

北角 三宗

【あらすじ】

戦国時代、南奥州塩松。

大内定綱の前半生を描きます。

塩松は強国に囲まれた小国なればこそ、周辺諸氏との外交関係で以つて体制を維持していました。

定綱は主家石橋氏を放伐し、「塩松殿」の名跡を継ぎます。その後も、情勢を読んで他家を翻弄し、勇躍の時を迎えたのですが

……。

弘治の頃（1555～58）。塩松は小浜城。ある昼下がり、大阿弥丸は私室にて、傳人と共に史籍の回読をしていた。

「壬午入吉野宮時左大臣蘇我赤兄臣右大臣中臣金連及大納言蘇我果安臣等送之自菟道返焉或曰虎着翼放之是夕御嶋宮」

『日本書紀』卷第二十八、天武天皇の即位前紀の件である。

大海人皇子は、この大津を出た翌日（天智天皇十年十月廿日）に吉野へ入り、翌年夏までの半年余りを当地にて頓居する。そして、病床にあつた天智天皇が死んだ後、遺児たる大友皇子が自分を弑しようと計画していることを知るや、僅かな兵を率いて打倒に立つ。そして諸勢力を糾合しながら北へ攻め上がり、挙兵からひと月後には大津朝を滅ぼしてしまう。

寡兵にて立ち、大敵に当たつてそれに打ち勝つ。
英雄譚はいつの世も子供の心を惹き付ける。

大阿弥丸もその例に漏れず、退屈な話の羅列に見える『日本書紀』の中では、ここからが最も好きな箇所に当たる。この分冊ばかりはもう幾度も読んでいるのに、心は逸つた。

そのとき、父の小姓がふすま越しに声を掛けた。
「お父上様がお呼びです」

大阿弥丸は落ち着いた表情で頷いて見せたが、回読の腰を折られ

たことに不快を得、不意の呼び出しに戸惑い、思い浮かばぬその用件を訝しんだ。そして父の書斎へ歩を進めるに伴い、心が石のように重くなつてゆくを感じていた。

父にしてみれば、いずれ自分の名跡を継がせることになるであろう嫡男のこと。一族の繁栄、そして主家の栄耀の道を託すことになる以上、万事につけ、高みを目指す気持ちを持ち続けるようにと、薰陶してきたつもりだろう。妾腹の子も幾人かいるが、正妻腹で長男となれば、次代の惣領となることはもはや誰の目にも疑いない。

大阿弥丸には、そんな父の評価が狭い了見に捉われているように思われ、殆ど顔を合わせぬ日などないにも関わらず、肉親にも関わらず、馴染むことができないでいる。父の気持ちが解らぬ訳ではない。ただ、惣領としては兎も角も、次代の筆頭家老と言われても、ピンと来なかつた。

主君には男子がない。とすると、いつたい自分は誰に仕える為にこのような教えを受けていのだろう、という疑問がずっとあつたからだ。

ただ、斯様な期待は余計なお世話と感じつつも、書物も弓馬も嫌いな性質ではないことから、常に自ら進んで鍛錬している。そんな前向きな姿勢に対してまでも更なる啓蒙を求めてくるものだから、一層父を避けるようになつっていたのだった。

大阿弥丸は書斎に入つて父に対座すると、暫くの間その凝視に晒された。父は珍しいものでも見るようだ、目を丸くしてジロジロと大阿弥丸の容貌と所作を細見している。

その、いつもは見せぬ父の仕草に、どこか殺氣にも似た鬼気迫るものを感じ取つた大阿弥丸は、頻りに逃げ出したい衝動に駆られたが、正座した膝の上で拳を握り、じつと我慢していた。

父がおもむろに口を開いた。

「其方を、……養子に出すことにはいなつた」

父の膝下の辺りを見つめていた大阿弥丸は、その言葉に対し反射的に目を上げた。耳を疑つて問い合わせたが、呑んだ息が継げなかつた。

父の後継者となることを疑わなかつたからこそ、今の自分がある訳で、それを否定されてしまつては、致仕・放逐と一緒に思つた。

父が言葉を継ぐ。

「殿の婿となる」

「……えつ？」

漸く言葉が出た。

主君には女子も一人いるきりだつた。名を志保といつ。その母は父の妹、つまり大阿弥丸には叔母に当たるので、この女子とはいと同士ということになる。

この志保姫は大阿弥丸より少し年上で、主君はこれに婿を取るべく周辺諸氏に様々働き掛けてきたのだが、なかなかまとまらないでいた。

大阿弥丸はずつと、自分はその姫君の婿に入った者の家老になるのだという、漠然とした思いで系図上の彼女の位置付けを意識しており、彼女自身というものに関心を払つたことなどこれまで殆どなかつた。ただ子供心に、まだしつかり見たことのない姫君のことを、その縁遠さから、余程の醜女なのだろうと勝手に思つっていた。その程度の存在である。

自分がその婿に入るとは、ゆくゆくは名代にでもなり、姫との間に生まれる子供に「塩松殿」の名跡を譲る役回りになるということ

である。

大阿弥丸は何とも実感がなく、半ば放心状態の父に倣つて神妙に座つていた。

1 (後書き)

初投稿なので、行間の空け方やら1回分の長さや、手探りです。
ご了承下さい。

塩松は、南奥州安達郡の東半部にある地名であり、地域の総称でもある。同郡西半部の一本松とは郡の中央を縦断している阿武隈川を境とし、北は伊達郡小手郷、南は田庄村に接する。東の山岳地帯を越えると、相馬領の行方郡や標葉郡に通じる。

地勢は、郡東端にある日山を最高峰として中小の山岳が乱座し、西方の阿武隈川へ近付くに従い平地が広くなる。山岳の谷間を縫うように川が縦横に流れ、それらはいずれも阿武隈川へ注ぐ。小浜川は塩松の中央を南北に縦断、口太川は塩松の東部から南部へ大きく囲繞するように西流する。この両川は小浜北方にて合流、更に阿武隈川へ注いでおり、この二つの川に平行して主要道が走っている。

戦国期、塩松は石橋氏の領分となっていた。石橋氏は足利一門として室町前期に奥州へ下向し、塩松に土着した名族である。

塩松は石橋氏以前から、宇都宮氏や吉良氏といった名門が拝領していた由緒ある土地柄で、石橋氏もまた、一本松の畠山氏と並んで南奥に重きを為していた。

石橋氏の居城は、住吉城と塩松城の二つが本城として存在する。両城は口太川を挟んで東西に隣接しており、蛇ヶ淵の渡しや幾つかの小橋で連結している。そしてそれぞれ東の新殿、西の小浜などの城砦に向けて街場が展開され、本城を中心とした防衛圏とでもいうべきものを形成しており、重臣の居館の多くがその範囲に收められていた。即ち両城は、周辺部も含めて広大な一つの城域、それぞれを曲輪・出城という位置付けとして把握することができよう。

大内定綱は天文十五年（1546）、塩松の小浜に生まれた。父

は石橋式部大輔尚義の筆頭家老、小浜城主備前守義綱。母は常州太田城主佐竹義篤の娘という。幼名は大阿弥丸。幼くして才気が走り、性は淡白にして礼を重んじ、大声を出して騒ぎ立てるようなことがないが、かといって沈鬱な風情もなく、いつも気付くとその場の空氣に馴染んでいる。一方で怜俐な面を持ち、親しい朋輩や近習の些細な誤りであつても厳しく咎め立て、自ら裁くことを快しとする趣もあつた。

大阿弥丸の名は、石橋家が篤く帰依している時衆に因る。

天文初頭、尚義の父先代定義は隠居後入道して静阿を名乗り、居城住吉城域に十願寺金山道場を開山、塩松に於ける時衆の根拠と為した。その影響によつて、嫡男の尚義はもとより、家中諸士に至るまで時衆を嗜んだ。何阿、何々阿という名を好むのは、時衆の特徴である。即ちそれが大阿弥丸の命名となつた次第で、石橋家中ではこれまでもしばしば用いられてきた幼名である。

隠居後も大御所として内外の政事の中心に居座り続けていた定義が天文十四年に死ぬと、当時その筆頭家老の地位にあつた義綱の父義生も後を追つて腹を斬つた。

かくして慌しく政権の世代交代が遂げられ、前もつて尚義付きとなつていた義綱の時代がやつてきたのである。そんな中での嫡男の誕生は義綱にとつて、政権掌握に花を添える、洋洋たる未来を約束するものと感じられたに違いない。

しかし時代はその祈りとは反対に混迷の一途を辿り、やがて塩松にも暗い影を落としてゆくことになる。

当時、巷では伊達稙宗・晴宗父子の相克、所謂「伊達天文の乱」が南奥羽全域を席巻していた。

この擾乱は、天文十一年に晴宗が稙宗を当時の伊達氏本拠西山城

に幽閉したことが、発端となっている。父子不和の原因は様々取り沙汰されているが、争乱に至る直接の原因は、植宗の三男時宗丸が越後国守護上杉定実の養子となるに当たって、植宗がその護衛として精兵を多数付けようとしたのに対し、晴宗が異を唱え入嗣自体を阻止しようとした為とされる。

晴宗の思惑は一応遂げられたものの、事態は思わぬ方向へ進んだ。幽閉されていた植宗はその寵臣小梁川日雙によつて救出されると、周辺諸氏の協力を得て反撃に転じたのだ。

伊達家中には晴宗を支持する者が多かつたものの、周辺諸氏の多くが植宗を支援したことから、開戦当初は植宗党の勢力が晴宗党を圧倒していた。その主勢力となつていたのが、田村隆顯・懸田俊宗・相馬顯胤といった植宗の女婿達や畠山家泰・義氏兄弟・石橋定義などである。この中でも老練な定義は、所領が彼らの中心に位置することもあって、諸勢力間の連繫を取り持つて糾合するのに大きな役割を果たしていた。

しかし定義の死後、残された尚義に父の代役は果たせず、植宗党の足並みは次第に乱れていった。そこへすかさず晴宗が内応の手を差し伸べたものだから、諸氏家中内部で対立関係が生まれ出した。各々自領内の平定に力を尽くさねばならぬ状況となり、植宗への協力を控えざるを得ない者が多くなる。その為、元々伊達家中では支持者の多かつた晴宗の方へ、一気に流れが傾いていった。すると諸氏の間でも、その動きに敏感に反応した者から次々と鞍替えしてゆき、その傾向に拍車を掛けた。

塩松でも、義綱が中心となつて早く晴宗支持を表明、亡父の遺志を尊重して植宗党に固執する尚義へ否を突き付けた。そして次々と家中諸士を糾合していつて主君の手足を奪い、最終的に尚義に晴

宗と諱みを通じさせることに至った。

この騒乱は結局、同十七年秋に至り、足利將軍からの重ねての和睦命令に従つ形で終結を迎えた。但し、終結したのは父子相克のみであり、そこから派生していた数多の対立関係は、その後も延々と続くことになる。

この争いが奥州に於ける戦国時代の皮切りとされる所以である。

その中で大阿弥丸は、僅か安達半郡の塩松を守る為に汲々とし、ときには下手な謀略にまで手を染めている父の姿を、鼻先しか見えぬみみつちい男として他山の石と見なしながらも、心の奥底では本人の気付かぬ内に鏡として培つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073z/>

変節

2011年11月30日17時56分発行